

社会知性開発研究センター

「川崎・上海フォーラム」



2月15、16の両日、社会知性開発研究センターが川崎市産業振興会館で開かれ、約100人が参加した。写真。

上海から6人の講演者を招き15日の本フォーラムを開催。上海から6人の講演者を招き15日の本フォーラムを開催。

△では、「新段階の日本と中国の中小企業」川崎と上海の連携の可能性」をテーマに、3人の講演が日中同時通訳で行われ、川崎と上海両地域の中小企業の新たな成長課題とビジネスマッチングの可能性を探った。

開会に先立ち、荒木敏夫社会知性開発研究センター副センター長(文学部教授)がこのフォーラムをステップに外部に発信できるような新たな研究組織ができることを期待したいとあいさつ。宮本光晴都市政策研究センター代表(経済学部教授)は、

社会学専攻優秀卒業論文

文学部人文学科社会学専攻4年次生の優秀卒業論文発表会が1月28日、生田キャンパスで開かれ、4年次の3人が後輩

△後輩に論文を発表する坂本祐介さん

学生ら約200人を前にして力作を披露した。2010年度専攻社会学会(川上周三会長)の中で行われた。

優秀卒業論文は、同専攻ゼミナールの指導教員が選んだ代表論文を、さらに大学院生が審査し優秀作を決める。本年度3

作品は以下の通り。

▽坂本祐介さん(柴田弘捷ゼミ)「マクドナルドの合理化によって従業員に何が起るのか? アルバイトの視点から」

▽福田洋佑さん(鳴根克己ゼミ)「社会的見地から見た吃音者、吃音者と正音者の相互行為と声の規範に着目して」

▽北野まいさん(秋吉美都ゼミ)「友達の友達」は友達か? 紹介と言う行為からみた友人ネットワーク形成」

3人の発表に大学院生の杜敏さん、古川雄大さんが選んだ代表論文を、さらに大学院生が審査し優秀作を決める。本年度3

「ワールド・カフェ」で共有



△嶋根・飯沼両ゼミ生が語り合う

さのゆくと」に多数出席。現代の若者が抱える問題を考えた。

今回はもう一度「若者たちの生きづらさ」はなにか」をワールド・カフェの手法で考えてみよう」と実現した。

参加両ゼミ生30人が5、6人のグループに分かれ、「生きづらさとはなにか」「今の世の中は生きづらいか」「より良い社会の実現のために」を約2時間話し合った。その後、会場を変え懇親会が開かれた。

飯沼ゼミ長の木村拓也さん(3年次)は「両先生にも来ていただき、密度の濃い、有意義な時間を持つことができた。経済学部と文学部の交流のいいチャンスにもなった」と話した。

KS「コミュニティ・ビジネス・アカデミー」

第5期修了生は34人

文部科学省「社会人の学び直し」ニーズ対応教育推進プログラム」受託事業である「KS(川崎・専修)コミュニティ・ビジネス・アカデミー」第5期受講生の修了式が、2

原田博夫経済学研究科長が「皆さんは街おこし・村おこしの核となる人材育成の成功事例となっていくだろう」と君嶋武胤アカデミー特別顧問(元川崎市産業振興財団理事長)が「チャンスをつか

た。今後、誰でも学びたいときにアプローチし、生涯教育を実現することは大学の課題であり、本学はこれからも社会人の学びの機会を持つていきたい」とあいさつ。笠浩史文部科学大臣政務官

最後に、講師陣が執筆した入門書「市民のためのコミュニティ・ビジネス入門」(専修大学出版局)と写真の刊行が報告された。

△成果発表を行う徳田アカデミー長

△後輩に論文を発表する坂本祐介さん

△嶋根・飯沼両ゼミ生が語り合う

△成果発表を行う徳田アカデミー長

2年半の成果を報告

社会人の学びの場 システム作り完成

3月13日には、同アカデミーの2年半にわたる学びと実践を振り返る成果報告会が生田キャンパスで開催され、関係者など約100人が参加した。開会に先立ち、日高義博理事長・学長が「地域に密着した社会貢献、と情熱が今回の成果につながりまし



最後に、講師陣が執筆した入門書「市民のためのコミュニティ・ビジネス入門」(専修大学出版局)と写真の刊行が報告された。

最後に、講師陣が執筆した入門書「市民のためのコミュニティ・ビジネス入門」(専修大学出版局)と写真の刊行が報告された。

最後に、講師陣が執筆した入門書「市民のためのコミュニティ・ビジネス入門」(専修大学出版局)と写真の刊行が報告された。

最後に、講師陣が執筆した入門書「市民のためのコミュニティ・ビジネス入門」(専修大学出版局)と写真の刊行が報告された。

最後に、講師陣が執筆した入門書「市民のためのコミュニティ・ビジネス入門」(専修大学出版局)と写真の刊行が報告された。

最後に、講師陣が執筆した入門書「市民のためのコミュニティ・ビジネス入門」(専修大学出版局)と写真の刊行が報告された。

卒業年次留学生壮行会

2010年度の「卒業年次留学生のための壮行会」が1月21日、生田キャンパスで開催され、約30人が参加、留学生を激励した。写真。

当日は卒業年次留学生が7人と国際交流会SHIPなど日本人学生、中国留学生会、韓国留学生会のメンバー、教員側から日高学

長・理事長、大林守国際交流センター長、同委員の橋本一文学部准教授、秋吉美都人間科学部准教授らが参加した。日高学長から記念品が代表の張偉偉さん(経営学部)に授与された。

大林センター長の乾杯の発声の後、参加者は昼食をとりながらキャンパスでの思い出話や将来の夢を和やかに語り合った。

卒業年次留学生がひと言ずつあいさつをし、最後に学生各団体の代表者がそれぞれお別れの言葉を贈った。

最近、脳科学の本や番組をよく見かけます。男脳は忘れる脳で女脳は忘れない脳なんだとか。これは原始時代に、男性は狩りの恐怖をいち早く忘れて次の戦闘に備えるため、女性は子育てに必要な安全な場所や、食べたら危険な植物などを記憶しておくためだそうです。

今は21世紀。男性も子育てをすれば、女性も外で働き(戦い?)ます。それに、男女関係なく、いやがらせ(ハラスメント)を受けたりはいつまでも覚えてるものではないかと驚かされています。いやがらせをした側は、一時の感情などからやっただけで済ませず、喉元過ぎれば忘れず、いやがらせをしていない自覚がない場合には、覚えていようがありません。

時々「何年も経っているからもう時効だ」とか「昔のことをいつまでも蒸し返すなんてどうかしている」という独りよがりでご都合主義の主張を耳にします。しかし、この弁明はハラスメントには通用しません。単に時が過ぎても解決していないからこそ、わだかまりが残っているのです。そして再び同じようなことが繰り返されそうだからこそ、その恐怖心を忘れないのです。

このことは、セクハラに限りません。パワー・ハラスメントやアカデミック・ハラスメントなどのいやがらせにも共通です。現代の複雑な社会構造の中では、誰もがやる側・やられる側に回る危険性があります。少しでも防ぐには、日ごろの言動を見直し、他者を尊重したうえで「信頼関係」を築いていくことでしょうか。

(岡田 もえ子)

セクシュアル・ハラスメント防止委員会から

時々「何年も経っているからもう時効だ」とか「昔のことをいつまでも蒸し返すなんてどうかしている」という独りよがりでご都合主義の主張を耳にします。しかし、この弁明はハラスメントには通用しません。単に時が過ぎても解決していないからこそ、わだかまりが残っているのです。そして再び同じようなことが繰り返されそうだからこそ、その恐怖心を忘れないのです。

このことは、セクハラに限りません。パワー・ハラスメントやアカデミック・ハラスメントなどのいやがらせにも共通です。現代の複雑な社会構造の中では、誰もがやる側・やられる側に回る危険性があります。少しでも防ぐには、日ごろの言動を見直し、他者を尊重したうえで「信頼関係」を築いていくことでしょうか。

(岡田 もえ子)